

SS2009 WG7 ユーザ企業の IT 部門の戦略 ポジションペーパー

株式会社ビーコン IT 大須賀一暢

1. 自己紹介

1. 1. 自己紹介

1983年、小規模 SI ベンダーから二重派遣にてNTTへ出向し、電話交換機関係の開発に従事、その後、自社にて中小企業のSI開発や工場系の組み込みアプリケーションの開発を行う。その後ビーコンITにてデータベースサポート、アプリ開発、周辺ツール開発でお客様の基幹システム開発に参画。その後、お客様への製品導入サポートを通じ、情報系サブシステム連携や DWH 構築を経験し、この経験から国産 ETL 製品の企画、開発を行う。現在自社製品の企画開発部門の責任者として各製品の開発プロジェクトの推進とともに、自社製品の共通基盤を開発中。

1. 2. 自分の立場と今回の WG テーマについて思うこと

私の今の業務は、自社が展開するビジネスで使用するツール製品を企画、開発することですが、今回のテーマで考えると、オーダーメイド開発を行う SI 企業より、我々はユーザ企業の IT 部門に近いと考えています。

我々の開発では、開発コストを抑えるための新技術の導入や部分的な他社製品の採用、開発生産性、アウトソーシングと、若干形は違えど情報システム部門と同様の悩みを抱えています。また、SI と違って一度作ったものは保守し続けなければなりません。これは、基幹システムを自社開発で導入した場合とよく似てい

ると思います。

もちろん、今回の WG を通してお客様の考えに触れることで製品の企画に役立てたいのはベンダーとして当然のことですが、自分の進めている製品開発という業務の問題解決のヒントを得られることにも期待していますので、どうぞよろしく願いいたします。

2. テーマについて思うこと

2. 1. 企業の中で IT 部門に求められること

直接的には、ビジネス要求を助ける IT インフラという道具を、いかに安く、早く、安定して提供し続けられるか、ということだと思います。

このために、解決しなければならない様々な問題があり、IT 部門は年々複雑になる IT 技術の中でこれらの問題を解決するための努力を日夜行っている状況なのではないでしょうか。

◇実現技術

言語、OS、プラットフォーム、インターフェース、規格、技術の習得と継承、

◇開発効率

技術者の育成、開発メソドロジー、テスト効率化、パッケージ製品の検討、採用、製品同士、製品と自社システムとの融合、アウトソーシングの有効利用

◇現場ニーズの収集(顧客ニーズの収集)

効率的なニーズ収集方法、技術者と現場との意思疎通、ニーズ収集から実現までのタイムラグ

◇保守・維持

保守費用、保守形態、製品寿命、入れ替え時期と費用

◇予算

IT 部門の必然性の説得、必須であることの説明、コスト削減の検討、実施とその意味の経営サイドへの説明

考えてみると今回のテーマそのものですね。

これらの事象を論議するには、どこかにフォーカスを当てて掘り下げる必要があるのでは、と思います。

2. 2. インソース・アウトソース戦略

皆さんは、アウトソースはメンバーとして参集するのか、それともオフショアのように部分的に発注するのかはどのようにお考えでしょうか。

ソフトウェアは、機械部品のように部品単位で仕様を明確にして外注することができると思われているようです。最近では価格差も少なくなってきましたが、海外オフショアの衝撃的な単価が、そのような無理な部分開発に走らせる傾向を加速したように思います。もちろん、その問題点を把握できる経営者がいる場合や、経営者をきちんと説得出来た場合は別ですが。

しかし、ソフトウェアにおいてもそのような手法ができる方法を考える必要はあると思います。コア部分は自社で開発し、枝葉の部分はインターフェースを明確にした上で外注し、安いコストで短期間で仕上げる。これが実現できれば、部品はブラックボックスでかまわないし、品質が悪かったりいらなくなったら捨ててもいいし、それを元にエンドユーザーニーズを具体的に収集できることにもつながります。

この理想を実現するためにはインターフェースの明確化が必須となりますが、インソース、アウトソースの境目の明確化のためには必須のように思います。

2. 3. ユーザとベンダーのマインドのズレ

製品開発者としては、あるテーマを解決するのに十分な機能、価格を実現しているつもりですが、実際に企業が使うのは部品ではなくそれを内包したシステムです。提供部品はそのまま使えないばかりか適用するのに作業が必要だったりします。

また、ベンダーは価格を下げるため、あるいは自社の売上を上げるために、同じ仕様の製品をニーズに近い多数の企業に販売しなければなりません。製品はカスタマイズなしに全ての企業に適合できるわけがありません。

個人的にはこのすりあわせの部分がもっと何とかなればと常日頃から考えているのですが、まだ明確な解決策は見つかっていません。

2. 4. アカデミアとの連携

製品がある課題を解決するために、研究者などのアカデミアの協力を仰ぐというのは、有効な方法だと思います。しかし、(経験がないからかもしれませんが)研究者からの情報は製品化する(使用する)のにもうワンステップ必要と感じています。業務目的とアカデミアの回答はずれないのでしょうか。結局その技術を採用する側が、必要な部分、犠牲にする部分、その価値を計って使用することになるのでしょうか。

3. ここが不満だ！現在のIT産業

いろいろあるのですが、ありすぎて発散しますので、皆さんと直接お話し出来ればと思います。